

## 旧暦の2033年問題

### 旧暦のしくみ

私たちの日々の生活に欠かせないものの一つに「暦」があります。いま私たちが使っているのは太陽暦ですが、それに加えて「旧暦」があります。旧正月や旧盆、お月見など、今でも旧暦の日付で行う行事もあります。そんな中、来る2033年に旧暦に関する一つの問題が起こるということで、暦に関心を持つ人々の間で最近話題になっています。それが「2033年問題」と呼ばれるものです。

「旧暦」は、現行の太陽暦が採用される1873（明治6）年以前に使われていた「天保暦」と呼ばれる暦をベースに作られたものです。これは太陰太陽暦と呼ばれる種類のもので、月の満ち欠けからの日付が決まり、月が全部欠けた新月の日を毎月1日とします（図1）。つまり、新月を含む日を毎月1日とし、次の新月までの間を1ヶ月とするのです。



図1. 旧暦の日付と、月の満ち欠けの関係

日付が決まったら、次は毎月の名称です。これは、月の満ち欠けから決めた1ヶ月の間に、二十四節気のうちの「中気」とよばれる日のどれが入るかによって決定しています。二十四節気は、太陽の通り道である黄道を24等分し、それぞれ黄道上の15度刻みの点を太陽が通過する日として決められていて、そのうちの半分を「中気」として暦の月の名称を決定するのに使っています。それぞれの中気と月名の関係は表1のとおりで、例えば雨水が入るとその月は1月になります。

ところが、月の満ち欠けの周期は平均29.5日であるのに対し、中気と中気との間隔は平均30.4日であるため、時には新月から新月までの間に中気が入らない場合があります。そこで中気の無い月は「閏月」として、通常の12ヶ月にまるまる1ヶ月挿入するようになっています。挿入した月の名称は、その直前の月名に「閏」をつけて呼びます。つまり7月の後に閏月が来た時は「閏

7月」とするのです。閏月は、19年に7回の割合で入ります。ただし、地球の公転が等速でないことや、月の運動の不規則さの理由から、月の満ち欠けの周期や、中気と中気の間隔が変動します。時には、一ヶ月の間に中気が二つ入る状態も起こります。そこで「天保暦」では、春分、夏至、秋分、冬至の4つを優先し、まずこれらを含む月を必ず2月、5月、8月、11月とし、次に他の月の名称を決めるように対処します。

中気名	月名	中気名	月名	中気名	月名
雨水	1月	夏至	5月	霜降	9月
春分	2月	大暑	6月	小雪	10月
穀雨	3月	処暑	7月	冬至	11月
小満	4月	秋分	8月	大寒	12月

表1. 旧暦の月の名称と中気との関係

### 旧暦の2033年問題とは？

しかし、2033年の後半から2034年の前半にかけての間を見ると、下の表2で示したように、中気が無い月が3回、中気を二つ含む月が2回が生じるのです。

	旧暦の1ヶ月	中気の有無
1	8/25日～9/22の月	中気無し
2	11/22～12/21の月	11/22が小雪、12/21日が冬至
3	12/22～2034年1/19の月	中気無し
4	2034年1/20日～2/18日の月	1/20日が大寒、2/18日が雨水
5	2034年2/19日～3/19日の月	中気無し

表2. 2033～2034年における月の満ち欠けと中気の関係

これを見ると、前述したルールでは、毎月の名称を全て決定することができません。これがいわゆる「旧暦の2033年問題」なのです。

この問題を解決するには何か新しいルールを決める必要がありますが、旧暦は既に廃止された暦をベースにして便宜上作られたものなので、公式な旧暦は存在しないのです。日本の暦を担当する役所である国立天文台でも計算は行っていません。そこで、有識者や民間の団体などの間で、いくつかの解決案を考えるなどの動きが出ています。今後、一定の案が示されることが予想されます。